



バロック絵画研究における、フランスの新世代の研究者たち

木村, 三郎

(Citation)

美術史論集, 12:121-126

(Issue Date)

2012

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010427>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010427>



バロック絵画研究における、フランスの新世代の研究者たち

木村 三郎

一 ジャック・テュイリエ教授の逝去

コレージュ・ド・フランス名誉教授、ジャック・テュイリエ (J. THULLIER) 氏 (一九二八―二〇一一年) が逝去された。一〇月中旬のことであった。筆者は、二〇一一年七月末に行った、神戸大学の集中講義において、フランスにおける美術史の世界に大きな影響を残したテュイリエ教授の方法についても触れる機会があった。それは、拙著『西洋近代美術史の見方・学び方』(二〇一一年、左右社、放送大学叢書、補遺1) にも紹介している。筆者が薫陶を得た恩師であったということは置くとして、テュイリエ教授は、とりわけ、一九七〇年代以降の、フランス美術史学においても、欠くべからざる存在でもあった。その追悼記事が、インターネット *Tribune de l'art*¹⁾ に、逝去後早々に掲載された。わが国でも、フランス美術史研究者の間にはいち早く伝わり、哀悼と哀惜、そして、深い喪失感に襲われた人は少なくない。

ルーヴル美術館学芸部に在籍し、展覧会活動を鋭意主導してき

た多くの学芸員たちが、その都度、分厚く、学術性高い展覧会カタログを刊行し続けることができるのも、「テュイリエの方法」 *Méthode Thullier* と称される、高度の学術性を生み出す方法を学生時代に学んだからである。国際美術史学のレヴェルにおいても、フランスにおける美術史学が復興を実現し、光彩を放ち、また、歴史実証主義の美術史学が、情報科学、そして博物館学と相携えて、学術 (シアンス) としての人文科学を先導するようになったからである。

一方で、テュイリエ教授の学問上の足跡は、極めて保守的な古文書研究に裏付けられている (代表作 1960, *Actes du Colloque Poussin*)。フランス実証主義歴史学のオーソドックスな手法に忠実に、国立古文書館、国立図書館等に保存されている文書を発掘した。その解読と紹介を基礎に画家を論じる手法であり、それは、最も力を注いだプッサン研究 (1974; 1994, *Flammarion*) に結晶している。一方で、名前は知られていたが絵画制作の実態がよくわからなかった十七世紀の画家たち (1978 *Le Nain*; 1982 *Lorrain*;

1988, La Hyre ; 1990-91 Vouet ; 2000, Bourdon ; 2002, Baugin; 2006 Stella) の蘇生を、 展覧会を契機に試た努力とその成果は大きな意味を持った。

本稿では、その先導者への哀悼の意味を込めつつ、一方で、テュイリエ教授に学んだ新世代の近年の研究動向を、やや曖昧ではあるが、還暦の前後にいるその中間の世代の業績と比較しつつ、素描してみたいと思う。

二 フランス美術史学の動向

A カタログ美術史・・・美術館収蔵絵画作品目録

テュイリエ教授と多くの展覧会カタログを実現し、またカタログを執筆して来た、その盟友とも称することができるとピエール・ローザンベール（ルーヴル美術館名誉館長）は、変わらず、活発な研究活動を行っている。近年も、

2010 ROSENBERG (P.), *Pierre Jean Mariette, catalogue raisonné*, M. Electa

を上梓したばかりであり、二〇一一年秋には、ルーヴル美術館で、批評家でありコレクターでもあった、このマリエットについての展覧会が開催された。今なお、健在といふべきである。

① フランドル絵画目録

ここで、ルーヴル美術館収蔵作品目録についての近年の刊行状況を一瞥したいと思う。先ず、フランドル絵画についてである。フランドルから始めるのは、フランドル絵画部門の責任者として、研究活動を主導してきた主任研究官、ジャック・フカールが、ローザンベールと同様、退官した後も旺盛な研究を継続しているからである。ちなみに、フカールは、その壮年時代に、ブルジョン・ド・ラヴェルニエ等とともに、次の目録を刊行している。

1979 FOUCART (J.), BREJON DE LAVRGNEE (A.) et REYNARD (N.), *Ecoles flamande et hollandaise, catalogue sommaire illustré des peintures du Musée du Louvre, I, RMN*

この時期以降、ルーヴル美術館絵画部門を担うこととなる前二者が加わった共著として書かれたこの目録は、学術性から見て画期的な仕事であった。しかし、そこには、タイトルに *sommaire* という語が用いられており、図版、作品データ、来歴、そして主要先行目録⁽¹⁾といったデータだけが簡単に書き込まれた、敢えて言えば簡略版であった。

そのフカールが、ちょうど三十年を経た二〇〇九年に、夫人の支援のもとに、フランドル絵画についての目録を一新する、詳細な収蔵作品目録を刊行した。

2009 FOUCCART (J.), *Catalogue des peintures flamandes et hollandaises du Musée du Louvre*, coordination éditoriale par FOUCCART-WALTER (E.), Gallimard

三十年という熟成期間を持った今回の目録は、大幅な改訂と面目を一新した内容を誇っている。内容も、画期的な方法を採用しており、そこには、次に具体的に紹介するロワールの目録と同じく、各作品についての詳しい内容の論文を掲載している。⁽²⁾

②イタリア絵画目録

イタリア絵画について考える場合、一九八一年と一九八八年に、ブルジョン・ド・ラヴェルニエが中心となって纏めた次の目録がその基準となっていた。⁽¹⁾

1981 BREJON DE LAVERGNEE (A.) et THIEBAUT (D.) (coordination), *Italie, Espagne, Allemagne, Grande-Bretagne et divers, catalogue sommaire illustré des peintures du Musée du Louvre*, II, RMN

1988 BREJON DE LAVERGNEE (A.), et VOLLE (N.), coordination par MENEGAUX (O.), *Musées de France : répertoire des peintures italiennes du XVIIe siècle*, RMN

その後、ブルジョン・ド・ラヴェルニエが、リール美術館館長

に転出し、ルーヴル美術館を離れて以降、その中心的な役割を引き継いだのが、ステファン・ロワールである。ロワールは、現在、最も精力的な仕事をしている主任研究官の一人である。以下に、一九九六年以降、彼が関わった同美術館収蔵作品目録を列記する。

1996 LOIRE (S.), *Musée du Louvre, département des peintures, école italienne, XVIIe siècle ; I. Bologne*, RMN

本カタログは、ロワールの最も専門とする地域であるポローニャ派の絵画目録である。ここでは切り離された、イタリアの他の地域である、フィレンツェ、ジェノヴァ、ロンバルディア、ナポリ、ローマ、ヴェネツィア各派の絵画については、更に十年の歳月を費やして、次の労作へと発展する。

2006 LOIRE (S.), *Peintures italiennes du XVIIe siècle du musée du Louvre : Florence, Gênes, Lombardie, Naples, Rome et Venise*, Gallimard

先に指摘した、フカール夫妻の目録と並んで、以上二点の目録は、ルーヴル美術館収蔵作品に絞られているとはいえ、イタリア絵画史の先行研究を網羅的に咀嚼し、総括したものである。規模、内容の芳醇さから見て圧倒的な水準である。「カタログ美術史の勝利」という言葉を使いたくなる程の出来映えであり、ルーヴル美術館絵画資料室 (Service d'étude et de documentation du département des peintures, Musée du Louvre) の、資料管理システムが可能な

らしめた果実である。これらの詳細な目録とは別に、次の簡略版も刊行された。

2007 LOIRE (S.), HABERT (J.), SCAILLIEREZ (C.) et
THIEBAUT (D.), *Catalogue des peintures italiennes du Musée
du Louvre, catalogue sommaire, coordination par FOUJART-
WALTER (E.)*, Gallimard

人文科学としてのフランスの美術史研究は、デジタル情報の公開の流れに連動している。Giconde による、フランス国立美術館収蔵作品目録の公開、そして、最近稼働を始めた、フランス国立図書館の版画室画像情報の公開が代表的なものである。

B・批評史

本稿では、まず、カタログ美術史の成果についての近況報告を行った。しかしながら、一方で、そうした成果を可能ならしめた、パリ第四大学におけるカタログ作成を基本とする教授法についての批判も常に存在していた。西欧における、たとえば英米、あるいはドイツにおける美術史研究方法の多彩な展開とその果実を眺めると、パリでは、保守的なカタログ作成しか教えない、という指摘は一九七〇年代以降、常について回って来た見解である。現在も、ロジェ・シャルティエ (R. CHARTIER) を筆頭にして、パリのアナール派の方法が人文科学にもたらし続けている成果にも、どこか醒めているその態度には、厳しい言説が生まれても仕方がなかったとも

いえる。そうした潮流に敏感であったパリ大学の新世代の教授のアラン・メロは、カタログ美術史の基礎的な方法を前提としながら、新しい試みを行っている。

1996 MEROT (A.), *Les conférences de l'Académie royale
de peinture et de sculpture au XVIIIe siècle*, Ecole nationale
supérieure des beaux-arts, Coll. Beaux-arts histoire

メロ教授も、画家ル・シユウールのカタログ・レゾネ作成 (1987; 2000, *Le Sueur*) で自分の研究者としての世界を確立した人である。しかしながら、その後の方向は、多彩であり、本書は、王立絵画彫刻アカデミーにおける講演録を批評史的に扱っている。

2007 MEROT (A.), *Généalogies du baroque*, Gallimard

この研究は、ヴェルフリンの方法も意識した、*baroque* という語とその意味の広がりや批評史の視座から論じたものである。

2009 MEROT (A.), *Du paysage en peinture : dans l'Occident
moderne*, Gallimard

古代から十九世紀までを視野に入れた風景画論を展開している近年の著作である。

C・宗教絵画史

フランス十七世紀研究では、一方で、マルク・フュマロリ (M. FUMAROLI) (コレージュ・ド・フランス名誉教授) の存在

が厳然たる意味を持っている。元来が文学者であるフュマロリは、*L'Age de l'Eloquence* (2001, Droz で再版) をはじめとする修辞学を中心とした文学史家としての業績を骨格に、通常の美術史家にはなし得ない研究を該博な教養を背景に展開している。本稿では、その影響下から生まれた、新世代の研究者を紹介してみたいと思う。フュマロリが、イエズス会の宗教図像論の先導者であったという事実から、フランスでは、ルイ・レオ (L. REAU) のキリスト図像学研究 (1955-59) 以降、沈滞していたこのジャンルに新しい血が流れ込んでいる。シヨネ、リシユフォール、そして、クジニエの業績である。代表的な文献だけを挙げておきたい。⁽⁴⁾

1992 CHONE (P.), *Emblemes et pensée symbolique en Lorraine*, Klincksieck

ロレーヌ地方の寓意図像集の分析を軸に論じた該博な図書

1998 RICHEFORT (I.), *Peintre à Paris au XVIIe siècle*, Imago

シユナプールのゼミで学んだ、社会的な視点を軸にした労作である。

2007 COUSINIE (F.), *Images et méditation au XVIIe siècle*, Coll.

Art & Société, Presses Universitaires de Rennes

フュマロリの弟子筋の仕事ではないが、その影響下に生まれた、神学分析に詳しい労作である。

この小論は、現代フランスにおけるバロック絵画研究についての、一つの見取り図を超えるものではない。しかしながら、フランス美術史学が、特に、この時代についての研究の場合、一九七〇年代以降、カタログ美術史の方法をエンジンにして、発展をして来たことは事実であり、本論は、二〇一一年におけるその状況への解説である。今後、この時代の絵画を研究し、また、フランスへの留学を考える学生諸君たちへの一助になればと考えている。

註

(1) <http://www.latribunedelart.com/disparition-de-jacques-thuillier-article003316.html>

(2) ローザンベールは、現在、画家ブッサンのカタログ・レゾネ作成に取り組んでいると仄聞している。以下、大家の業績については、最近作のみを指摘する。

(3) この一九八八年には、翌年まで、展覧会『イタリア十七世紀絵画展』が開催されている。展覧会の責任者を務めたのが、ブルジョン・ド・ラヴェルニエであった。

1988-89 PARIS : Expo. *Seicento, le siècle de Caravage dans les collections Francaises*, Grand Palais, RMN, et le Groupe Fiat

なお、美術館収蔵目録が、論文集的な性格を強くしている傾向は、以下のオランダ絵画に関する業績にも共通している。

2007 BIKKER (J.) (ed.), *Dutch Paintings of the Seventeenth Century in the Rijksmuseum Amsterdam*, Yale University Press, 2 vol.

2007 LIEDTKE (W. A.), *Dutch Paintings in the Metropolitan Museum of Art*, Yale University Press

- (4) パリ第四大学で、テュイリエ教授の後任として着任したシュナッペール教授が、ジュヴェネやダヴィッドについてのモノグラフをカタログ形式で刊行した後に、1988 *Le géant, la licorne et la tulipe*; 1994 *Curieux du grand siècle* (2005, Flammarion, Champs, ペーパー・バックスの改訂版) を刊行したことはよく知られている。癌のために逝去する直前に校了した仕事であると、筆者がフユマロリ氏から聞いた最晩年の労作である。

2004 SCHNAPPER (A.), *Le métier de peintre au grand siècle*, Gallimard

同教授の業績の紹介は、わが国では少ない。しかし、邦訳のある次の図書は、シュナペール教授の研究の延長上にあるといえる。

1987 POMIAN (K.), *Collectionneurs, amateurs et curieux : Paris, Venise, XVIIe-XVIIIe siècle*, Coll. Bibliothèque des histoires, Gallimard; 邦訳・

一九九二年・ポミアン (K.) 『コレクション：趣味と好奇心の歴史人類学』吉田城・吉田典子訳、平凡社

- (5) Bibliothèque nationale de France, Banque d'images <http://images.bnf.fr/jsp/index.jsp> 西洋版画研究では、まずこのサイトを立ち上げ、クリックすべき時代に入ったといえる。

- (6) フランスにおける十七世紀の宗教図像論の紹介については、拙著、『ニコラ・プッサンとイエズス会図像の研究』(二〇〇七年、中央公論美術出版) を参照されたい。特に宗教図像学に特化した研究ではなく、パハト・ハッサニによる次の著者は、大きな存在感を持っている。大学教授の立場にある人物も多く、「新世代」とは言い難いが、ここに引用しておきたい。

1992 PACHT BASSANI (P.), *Vignon, 1593-1670*, Arthema

古文書による、絵画を巡る同時代資料の研究としては、

2001 STANIC (M.), *Journal de voyage du cavalier Bernin en France*, Macula

版画研究では、

1986 GRIVEL (M.), *Le commerce de l'estampe à Paris au XVIIe siècle*, Droz, Coll. Histoire et civilisation du livre, no.16

古典研究に基づく図像学研究では、

1996 NATIVEL (C.), *De pictura veterum: (Rotterdam 1694)*, Franciscus Junius, traduction et commentaire du livre I, Droz

フランス十七世紀における絵画は、貴族のバリの都市住宅であった邸宅の中に展示されることもあった(近刊予定の拙論「ラ・ヴリリエール邸ギャラリーとローマ古代史を描く歴史画」『日本大学芸術学部紀要』二〇一二年、五五号、を参照されたい)。そうした目配りをした場合参照せざるを得ない建築史研究に、新世代の目立った研究がある。ナント大学教授、アレクサンドル・ガディの研究である。パリ大学教授、クロード・ミノ(C. MIGNOT)のゼミで育った世代の代表格の研究者である。

2011 GADY (A.), *Les hôtels particuliers de Paris*, Parigramme

木村三郎(きむら・さぶろう)

一九七二年 東京大学文学部卒業

一九八一年 パリ第四大学大学院博士後期課程修了

現在 日本大学芸術学部教授